

PHOTO 倉科満寿夫

生研 ニュース

IIS NEWS
No.112
2008.6



●副所長
加藤 千幸

IIS
TODAY

今回の表紙にご登場いただいたのは、4月に副所長になられた加藤千幸教授です。教授室に入ってまず驚いたのは、先生の机。部屋の片隅に置かれ、机上には若干の書類と、いつも持ち歩くノートパソコンという簡素さ。2名の秘書さんの机が部屋の中心部を陣取っていました。「私は、ほとんど部屋にはいないので、ここは主に秘書さんのための部屋です。」最近では、内外の重要な会議や委員会へ引っ張りだこで、先生の“超”ご多忙さが感じられました。

機械工学科を修了され、15年間企業でご勤務の後、99年に東大に戻られました。ご専門は熱流体力学で、数値シミュレーションからモノを作っての実証まで幅広く展開されています。2003年からは立て続けに文科省の大型プ

ロジェクト（戦略的基盤ソフトウェアの開発など）のリーダーも務められ、この5年で獲得した研究費は、なんと数十億にもなるそうです。副所長としては、そのご経験を活かし、概算要求など予算関係の運営を主にサポートしてくださるとのこと、とても心強く感じました。一方で「研究費の獲得よりも、後世に残る学術体系をいかに創るかが大事」と、大学のなすべきことをしっかりお考えのところはさすがです。「大学はボトムアップの組織。分散的になりがちだが、共通の価値観を持てば、大きなパワーが出せる。そのような共通の軸をどのように引き出すかが、これからの生研の課題です」。柔らかな口調ではありましたが、熱い思いが伝わってきました。

(竹内 昌治)



革新的シミュレーション研究センターを設立

革新的シミュレーション研究センターは、本年(平成20年)1月1日に設立され、4月1日からは、新しいメンバーを加えて研究開発体制がほぼ整いました。本センターは、加藤千幸センター長を始めとして、兼務教員を含めて表1に示すような8名のコアメンバーで構成され、世界をリードする最先端・実用的シミュレーションソフトウェアの研究開発と普及、ならびに、シミュレーションソフトウェアを開発、あるいは活用できる人材の育成を主要な目的としています。また、広く社会に開かれたセンターであることを特長として、表2に示すように、多くの研究機関や産業界との密接な連携による研究活動を展開していきます。

計算科学シミュレーションは21世紀において最も発展が期待される分野であり、総事業費1150億円余りの超高速計算機開発の国家プロジェクトが平成18年度から開始されています。しかし、我が国では超高速計算機を最大限活用できるアプリケーションソフトウェアの開

発が遅れており、産業界においても大規模シミュレーションを活用する体制は整っていません。このような状況の中、当センターの前身にあたる、計算科学技術連携研究センターでは文部科学省の大型研究プロジェクト「戦略的基盤ソフトウェアの開発」(平成14～17年度、総事業費約36億円)と、その後継プロジェクトである同「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発」(平成17～19年度、総事業費約31億円)を推進し、PCクラスターから地球シミュレーターなどのハイエンドコンピューターに至るまでの計算機環境において稼動する、高速・高精度で実用的な基盤ソフトウェアの開発・実証と社会への普及を行ってきました。開発したソフトウェアのソースコードはウェブ上に公開しておりますが、これまでにソフトウェアのダウンロード件数は4万7千件を越えており、その普及は着実に進展しております。

当センターはこのような流れを汲み、それらの取り組みをさらに強化・発展さ

せることを目的として設立されましたが、ものづくり、ならびに安全安心分野の計算科学シミュレーションの国内外の中核拠点となることを目標としています。研究開発の実施に当っては引き続き学内外の多くの研究機関との連携を強化するとともに、産業界との密な協力関係のもとに真のユーザーニーズを柔軟に取り込む体制をさらに強化していきます。

来る7月29日(火)午後には、本センターの設立記念シンポジウムを開催する運びとなりました。西尾副学長による基調講演、センター側からの代表講演に加えて、前述の次世代スーパーコンピュータの開発プロジェクトを推進している理化学研究所、ソフトウェアのユーザである産業界から計算科学に係るトップリーダーをお招きしての招待講演を予定していますので、多くの方々のご参加をお待ちしております。

(革新的シミュレーション研究センター長
加藤 千幸)

表1 センターの構成員と研究内容

	研究開発内容
加藤 千幸 教授 (センター長)	非定常乱流現象や空力騒音の数値解析、大規模連成解析システムの研究開発
吉川 暢宏 教授	不均質材料の強度モデリング、FRP構造の最適設計、人体軟組織の力学モデリング
佐藤 文俊 教授	大規模タンパク質の機能・反応解析、量子化学シミュレーションシステムの開発
畑田 敏夫 特任教授	次世代デジタルエンジニアリングシステムの開発
大島 まり 教授 (兼務)	循環器系の数値シミュレーションシステムの開発
加藤 信介 教授 (兼務)	都市の安全・環境シミュレーションシステムの開発
桑水流 理 助教	人体軟組織機構シミュレーション、FRP構造の最適化技術開発
西村 勝彦 助手	エネルギー変換機器の数値シミュレーション

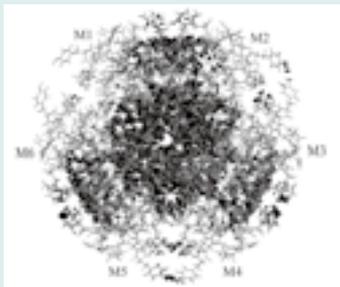
表2 センターのミッションと連携研究機関

ミッション	連携研究機関
<ul style="list-style-type: none"> 超高速計算機利用のための基盤技術と最先端実用シミュレーションソフトウェアの研究開発 産学官連携によるシミュレーションソフトの実証と普及 高度シミュレーションソフトウェアの開発、普及を担える人材の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 工学系研究科、人工物工学研究センター 立教大学、神戸大学、慶応大学、北海道大学、東北大学、九州大学 理化学研究所、物質・材料研究機構、海洋研究開発機構、宇宙航空研究開発機構、国立医薬品衛生研究所、消防庁、建築研究所、高度情報科学研究機構、他

連携

スーパーコンピューティング技術産業応用協議会
先端ソフトウェア産業応用部会

ライフサイエンス分野

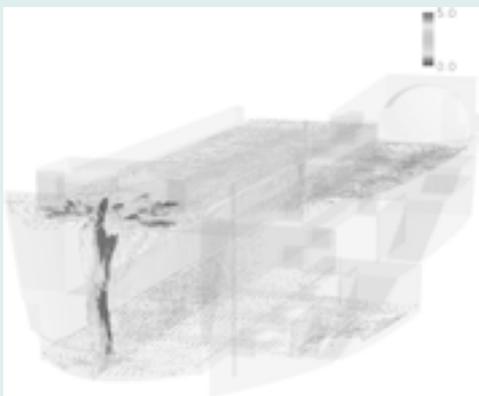


インスリン6量体(300残基)の全電子計算
(佐藤(文)研究室)



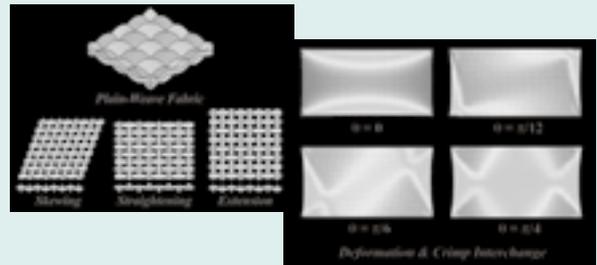
脳動脈瘤の血流血管壁連成解析
(大島研究室)

都市の安全・安心分野

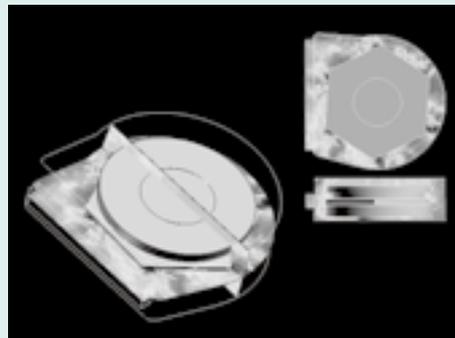


国内のある建屋の火災シミュレーション
(加藤(信)研究室)

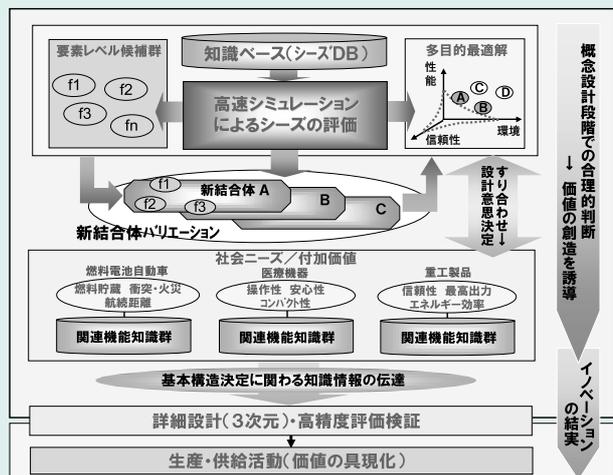
ものづくり分野



高機能繊維平織り複合材料の
均質化有限要素開発
(吉川研究室)



ポリゴンミラーの流体・振動騒音解析
(加藤(千)研究室)



次世代知識ベースデジタルエンジニア
リングシステムの概念
(畑田研究室)

エネルギー工学連携研究センター

国際的なエネルギー需給の逼迫動向のもとでエネルギー安全保障を確保し、地球温暖化防止のためにCO₂を大幅に削減することが重要課題となる中、エネルギー・環境技術に課せられる役割は大きい。東京大学では、エネルギーに関わる教育研究の部局横断的なネットワーク組織として、「エネルギー関連研究ネットワーク」（ネットワーク長：西尾茂文 理事・副学長）を組織し、次世代を担う総合的人材の育成に取り組むことを視野に入れ、エネルギーに関わる現代的課題の発掘と、その解決のためのシンクタンクの役割を果たし、エネルギー関連分野における教育研究の国際的な核の形成に資することを目的として活動を行ってきました。このネットワークの活動を受け、東京大学におけるエネルギー・環境技術に関する工学分野の国際的連携拠点として、2008年1月に、生産技術研究所と工学系研究科が共同でエネルギー工学連携研究センターを設立しました。本センターは、以下の3つの分野の研究グループで構成されており、それぞれのグル

ープの有機的な連携のもと、エネルギー工学の学問体系の構築を目指しながら、エネルギーの高度有効利用技術の開発やサステイナブルな産業・社会の構築をはじめとする様々な課題に取り組んでいます。

○エネルギーマテリアル分野

ナノテクノロジーとの研究融合を図りながら、マテリアルイノベーションにより新たな機能性を発現させ、エネルギーの高度有効利用に資する高機能材料を創成します。

○エネルギーシステム分野

エネルギーや物質が再生・循環する産業・社会基盤の構築を目指し、総合的な戦略立案・グランドデザインを行い物質とエネルギーの持続可能な自律協調需給システムなどのシステムイノベーションを図ります。

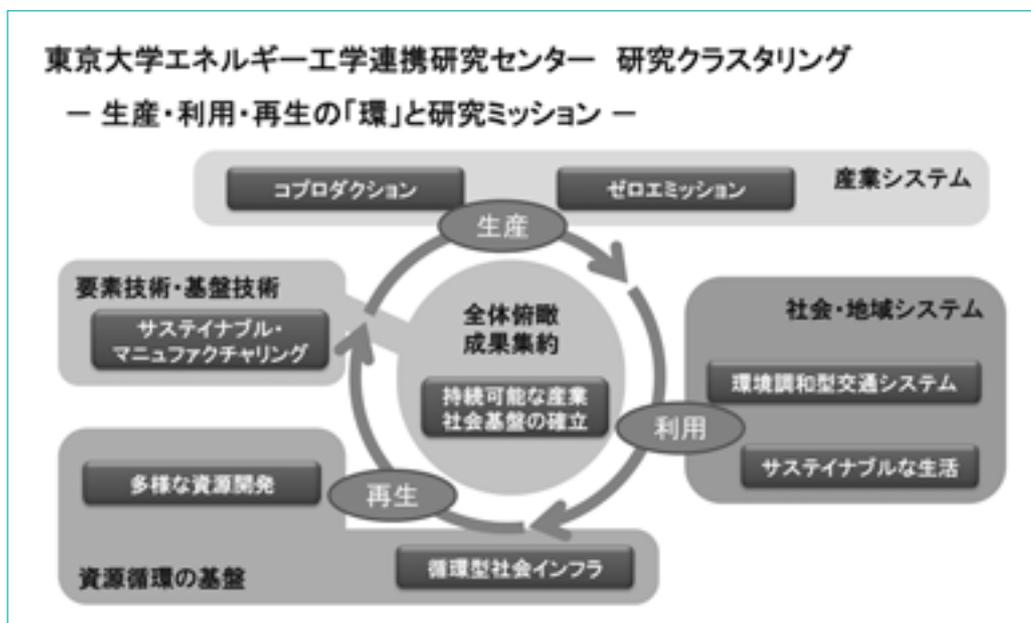
○エネルギープロセス分野

持続可能なエネルギーと物質の循環プロセスを考え、大幅な省エネルギーと省資源化を可能とする、エネルギーと物質の併産（コプロダクション）や

エクセルギー再生技術などのプロセスイノベーションを目指します。

本センターでは、広い分野に跨るエネルギー・環境研究の本質を理解するために、図に示したような研究のクラスタリングを行い、研究ミッションの明確化を図っています。従来、物質ならば生産と消費、エネルギーならば供給と需要といった二元論で整理されてきたのに対して、ここでは生産、利用、再生をつなぐ「物質・エネルギー環」という概念で、一方通行ではなく、物質もエネルギーも循環する構造を提案しています。この概念を基礎として、要素技術研究からプロセス・システム研究、さらには持続可能な産業・社会を構築するための戦略立案およびグランドデザインまで、全体を俯瞰した長期ビジョンのもと、エネルギーと環境問題の同時解決を目指した総合的な研究を推進して行きます。

（エネルギー工学連携研究センター
望月 和博）



第三者評価の実施

3月10日、11日の2日間にわたって独立行政法人 物質・材料研究機構理事長 岸 輝雄先生を座長とする第三者評価パネル委員の方に対して、第三者評価パネルに対する本所の活動のご説明とそれに対する質疑の会が開催されました。現在、評価パネルの先生方の最

終的な評価、ご助言を頂きまして、これに対応する生産技術研究所の対応の取り組みを行っております。評価、ご助言とこれに対します生産技術研究所の対応に関してはこの6月初旬頃を目処に、公表する予定で現在、作業を進めています。今回、お忙しい公務の間を縫って第

三者評価を実施して下さった評価パネルの先生方並びに評価資料の作成に尽力下さった本所の構成員、関係者の方々のご努力に深く感謝する次第です。

(第三者評価特別委員会 座長
加藤 信介)



第三者評価パネル委員

●前列左から

王 天民	北京航空航天大学 理学院 教授
樋口 博	シラキュース大学 工学部機械航空工学科 教授
前田 正史	東京大学生産技術研究所 所長
岸 輝雄	(独)物質・材料研究機構 理事長
岡村 甫	高知工科大学 学長
安藤 恒也	東京工業大学大学院理工学研究科 教授
富塚 誠義	カルフォルニア大学バークレー校機械工学科 教授

●後列左から

渡辺 正	東京大学生産技術研究所 副所長
加藤 信介	東京大学生産技術研究所 教授
三浦 勇一	(株)トクヤマ 相談役
垂水 尚志	(財)鉄道総合技術研究所 専務理事
岡本 一雄	トヨタ自動車(株) 取締役副社長
有信 陸弘	(株)東芝 執行役常務経営監査部長
黒澤 景	(独)物質・材料研究機構 評価室長
野城 智也	東京大学生産技術研究所 副所長



東京大学生産技術研究所 第三者評価パネル 平成20年3月10日～3月11日

韓国機械研究院との研究交流推進確認書更新の調印式

4月21日、韓国機械研究院 Kyung-Hyun WHANG 院長と本所前田正史所長は研究交流推進確認書に署名し、2003年6月に調印した交流推進の協定をさらに5年間継続することで更新を行った。韓国機械研究院は、韓国の政府出捐研究機関の一つとして機械、材料とその関連技術研究を行う国立研究所であり、国家戦略研究開発、国家レベルの研究・技術を企画し、韓国では最も権威のある研究所である。2003年第1回日韓マイクロ/ナノメカトロニクス技術国際シンポ

ジウムを開催した後、本所のマイクロメカトロニクス国際研究センター（以下 CIRMM）とスイス連邦工科大学も含めて毎年3カ国機関で合同シンポジウムを行い、多くの最新、先端の研究成果の情報交換、研究者間の交流を行ってきた。今回、韓国機械研究院からは、Kyung-Hyun WHANG 院長、Lee Eung-Sug ナノ機械研究本部長、Park Jung-Ho 博士3人が本所を訪れ、韓国機械研究院より2件の受託研究を受け入れ国際共同研究を行った金研究室を視察した後、前

田所長、野城副所長、藤田 CIRMM センター長、年吉准教授等の参席の上、調印式及び懇談を行った。彼らは当日午後、来日していた韓国の李大統領との他会議への参加のため、本所にて短い時間の訪問であったが、今後とも CIRMM の研究グループ及び本所内の他研究グループと共にナノ・バイオ・メカトロニクス研究分野において共同研究や交流がますます深まることを期待される。

（マイクロメカトロニクス国際研究センター 金 範 竣）



駒場バイオ交流会 2008 開催される



3月11日(火)、An棟コンベンションホールにて、「駒場バイオ交流会2008」が開催された。本交流会は、駒場地区の

生命科学やバイオエンジニアリングに関連した研究室の情報交換を目的として、生研の「工学とバイオ研究会」が中心となって企画された。これまでも、生研と先端研で交流会が開催されたことがあったが、今回は教養学部（駒場Iキャンパス）の研究室にも参加を呼びかけ、オール駒場で研究者交流を行うこととなった。前半は、

バイオマテリアルを中心とした講演会が企画され、生研からは畑中研一教授、教養学部からは村田昌之教授、先端研からは油谷浩幸教授と芹澤武准教授、企業からは産学連携に力を入れている野口研究所の天野純子氏から、それぞれ最新の研究成果が発表された。講演会終了後、引き続きポスターセッションが行われ、各部局間で多分野にわたる研究発表と活気ある討論がなされた。懇親会も同じ会場で行ったため、参加者は最終的に100名を越える盛大な交流会となった。次年度以降も各部局が持ち回りで開催する予定である。

（工学とバイオ研究会 竹内 昌治）

平成20年度 文部科学大臣表彰 生研から沖教授、白樫准教授、竹内准教授が受賞！



4月15日に行われた表彰式の様子

本年度文部科学大臣表彰に、生研から3名の教員が輝きました。沖大幹教授は、我が国の科学技術の発展等に寄与する独創的な研究を行った者を対象に贈られる科学技術賞（研究部門）を受賞されました。また、白樫了准教授、竹内昌治

准教授は、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績をあげた40歳未満の若手研究者を対象に贈られる若手科学者賞を受賞されました。受賞の理由となった業績名は以下のとおりです。

沖大幹教授

「地球水循環 世界水資源
統合モデルの構築の研究」

白樫了准教授

「生体の長期高品位保存の
研究」

竹内昌治准教授

「工学分野におけるバイオ
マイクロシステムの研究」

表彰式は、4月15日に虎ノ門パストラルで行われ、国歌斉唱の後、渡海文部科学大臣より表彰状が授与されました。おめでとうございます！

（総務・広報チーム 三井 伸子）

生研記者会見報告

2月27日臨時記者会見

フレキシブル有機・無機ハイブリッド発光材料を開発

物質・環境系部門

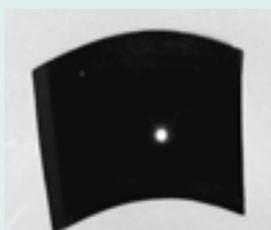
藤岡 洋教授発表

2月27日（水）の生研記者会見で藤岡研究室は、神奈川科学技術アカデミーと共同でフレキシブル有機・無機ハイブリッド発光材料を開発したことを発表しました。最近、有機ELと呼ばれる軽くフレキシブルな表示・照明素子が大きな注目を集めています。しかしながら、有機ELには寿命が短い、湿気に弱い、発光効率が低いといった本質的な問題がありました。一方、代表的な無機の発光材料である窒化ガリウムは、青色発光ダイオードや次世代DVD用レーザー等への応用で長期間安定に動作することが知られており、その内部エネルギー変換効率は90%程度にまで高められると言われていました。今回、我々は有機ポリマーを焼結して作製したグラファイトフィルムの上

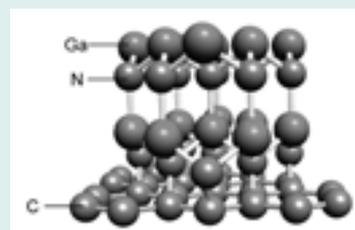
に、高品質窒化ガリウムを成長することによって、有機と無機の発光材料の特徴を併せ持った新しいハイブリッド構造の開発に成功しました。今回実際に、ポリマーを出発材料として作製した窒化ガリウムフィルムの光励起発光スペクトルを測定したところ、光の品質を示す半値幅が63ミリエレクトロンボルトと現在実用に使われている窒化ガリウムと同等であることが分かりました。この技術を用いれば、効率が高く寿命の長いフレキシブ

ル照明素子や大面積ディスプレイが安価に実現すると考えられ、省エネルギー社会を実現するキー・テクノロジーとして大いに期待できます。会見の内容は読売新聞や日経産業新聞等の新聞紙面の他、日経BP社や技術専門雑誌社のウェブサイトで詳しく報道されました。

（物質・環境系部門 藤岡 洋）



有機ポリマー出発材料として作製した窒化ガリウムフィルムからの発光



有機ポリマー焼結グラファイトと窒化ガリウムの結合の様子

生研記者会見報告

2月29日臨時記者会見

日本のウォーターフットプリントの7%は非持続的な水源？

人間・社会系部門 沖 大幹教授 発表
国立環境研究所 花崎 直太研究員



2月29日に行われた臨時記者会見において、人間・社会系部門・沖大幹教

授は、日本の「ウォーターフットプリント」の最新推計値を発表した。ウォーターフットプリントとは、日本が輸入している食料の生産にこの国・地域の水がどの程度使われているかを定量化したものであり、ここではさらに、どういう水源（雨水、自然の河川水、ダムからの放流水、非循環型の地下水など）からの水がどの程度利用され

ているかということまで推計されている。この推計は、ダム貯水池操作や灌漑取水等の人間活動も考慮した全球統合水資源モデルを用いることによって初めて可能となったものである。2000年当時を対象とした場合、日本のウォーターフットプリントは約42.7km³/年と算定され、そのうち約17%が灌漑用水、また約7%が非循環地下水起源であると推計された。これらの値は国立環境研究所花崎直太研究員との共同研究の成果として発表され、朝日新聞、読売新聞、共同通信、毎日新聞、東京新聞などに取り上げられた。

ているかということまで推計されている。この推計は、ダム貯水池操作や灌漑取水等の人間活動も考慮した全球統合水資源モデルを用いることによって初めて可能となったものである。2000年当時を対象とした場合、日本のウォーターフットプリントは約42.7km³/年と算定され、そのうち約17%が灌漑用水、また約7%が非循環地下水起源であると推計された。これらの値は国立環境研究所花崎直太研究員との共同研究の成果として発表され、朝日新聞、読売新聞、共同通信、毎日新聞、東京新聞などに取り上げられた。

(人間・社会系部門 鼎 信次郎)

4月7日臨時記者会見

生産技術研究所「水の知」(サントリー) 総括寄付講座を設置

サントリー株式会社 佐治 信忠代表取締役社長
サントリー株式会社 小嶋 幸次取締役 発表
東京大学 小宮山 宏総長
東京大学生産技術研究所 沖 大幹教授

2008年4月7日(月)、「水の知」(サントリー) 総括寄付講座の設置に関する臨時記者会見がサントリーホール(東京都港区赤坂)にて行われた。サントリー株式会社からは佐治社長と小嶋取締役が、本学からは小宮山総長と沖教授(生産技術研究所)が登壇した会見には、新聞、テレビ、雑誌などの各メディアから合計46社65名が出席した。

本寄付講座は、2005年に発足した水に関する本学の研究者による分野横断的な組織である研究連携ユニット「東大水フォーラム」を母体としている。本寄付講座の設置が「東大水フォーラム」の活動を一層活発にするとともに、世界の水問題解決に向けた「水の知」の体系化や次世代の人材育成に資するものと期待さ

れている。

サントリー株式会社からは5年総額4億円が寄付される予定であり、本学総括寄付講座への寄付金総額では史上最高額となる。本寄付金の半分は東大基金に振り向けられ、残りの半分が生産技術研究所、工学系研究科、新領域創成科学研究科に配置され「水の知」の形成に直接取り組む3名の特任教員による研究教育活動に利用される予定である。

なお、本寄付講座の実現は、本学渉外

本部をはじめとする皆様の多大なご尽力の賜物である。末尾ながら、関係各位に心より感謝を申し上げる次第である。

(水の知(サントリー) 総括寄付講座 横尾 善之)



左から沖教授、小宮山総長、佐治社長、小嶋取締役

学術講演会 東京大学総合防災情報研究センター 設立準備シンポジウムの開催

2008年3月12日午後、An棟コンベンションホールにて東京大学総合防災情報研究センター設立準備シンポジウムが開催され、約200名以上が参加しました。平成20年4月1日付けで、情報学環、地震研究所、生産技術研究所の三部局の連携により、総合防災情報研究センター（CIDIR）が開設されました。「情報」の概念を核として学内に分散する防災研究拠点を結ぶ、文理融合型の総合的な防災研究機関です。この度開催されたシンポジウムは、本センターの開設に先立ち、センターの目指す方向性を広く知ってい

ただくために企画されました。

吉見俊哉情報学環長、大久保修平地震研究所長、前田正史生産技術研究所長からのご挨拶の後、前半の講演会では京都大学防災研究所の河田恵昭教授、CIDIRセンター長の田中淳教授から防災研究の今後の展望などについて講演が行われました。後半では、「首都直下地震に備えた災害情報のあり方」をテーマにパネルディスカッションが行われました。NHK解説委員の山崎登氏を座長に、前半のご講演者に加えて内閣府の池内幸司参事官、地震研究所の瀬戸一起教授、

CIDIRの鷹野澄教授、本所の目黒をパネリストとして、今後の災害情報のあり方やセンターへの期待などについての熱心な議論がなされました。

なお、シンポジウム開催前には情報学環主催による記者会見も開催されました。また、シンポジウム終了後には懇親会も開催され、約80名が参加しました。今後のセンターの活動に期待したいと思います。

(都市基盤安全工学国際研究センター長
目黒 公郎)



記者会見の様子



前田正史所長によるご挨拶



パネルディスカッションのパネリスト



ほぼ満員の会場

平成20年度 生研ガイダンス開催される

平成20年度大学院新入学生ガイダンスが、4月21日にAn棟コンベンションホールで開催された。それに先立ち、教育・学務委員会および事務の方々が新入学生の所属専攻を調査し、会場で新入学生リストとして資料が配布された。その心は、生研の良き伝統である「専攻間の横のつながり」をもって欲しいとの願いである。比較的早くからの呼びかけが実ったのか、新入生（M1、D1）229名中121名の参加があった。

まず最初に、少々遅れ気味でガイダンスが開始されたこともあって、「工学研究はチームプレイが大切であり、時間を厳守すべし」との言葉で始まった前田所長の挨拶および生研の歴史紹介があった。続いて、「とにかく我々に相談すること」と本学ハラスメント相談室の松山ちづる相談員からのハラスメントガイド、本所電子計算機室の福島室長補佐より「ネッ

トワーク上のエチケット」情報倫理ガイダンス、本所施設管理チーム宮澤専門職員より駐輪などに関する生活の諸注意、吉川教授（厚生健康委員会委員長）より所内外喫煙ルール、懇親会でのマナーについての話があった。いずれも集団生活を快適に過ごすためのマナーに関する話であり、話し手の熱意も伝わり、参加していた学生諸氏は真剣に聞き入っていたように思う。

引き続き、例年ガイダンス後に開催される懇親会での話題提供であった、SNGの紹介と高校生のための生研公開に向けたボランティア募集の話が、大島教授（知の社会浸透ユニット代表）よりあった。また、学生代表（3部高橋研D2瀧原君、4部小倉研M2川上君）による生研キャンパスライフについての名？迷？講演があった。2人とも、何の申合せも無かったにも関わらず、生研ライフでの

横のつながりの大切さ、国際交流（IISパーティ）の楽しさを語っていたのが印象的であった。

その後ホワイエで開催された懇親会では、多くの教職員の方々、現役学生も加わって参加者が倍増し、飲食物が参加者の胃袋へ瞬間移動したことは想像に難くないだろう。昨年度のガイダンスより、懇親会と完全分離でガイダンスを行うようになったとのことであるが、今回もその方法が奏功し、参加した新入学生達はよく話を聞きよく食えることができたのではと思う。また本会が、生研の良さである横のつながりを作るきっかけになったならばと願っている。

（4部ニュース部会員かつ

教育・学務委員 小倉 賢）



快適性評価の研究成果 東急電鉄新型車両で実用化

生産技術研究所「快適性の工学的応用に関する研究グループ」の代表を務める須田義大教授らの鉄道車内の快適性評価に関する研究成果がこの度、東京急行電鉄の新型車両（池上・多摩川線用7000系）の座席配置に実用化された。

須田研究室では快適性を工学的に検討する取り組みを試みてきており、これまでに千葉実験所に実物大の鉄道車両モックアップ装置を導入し、通勤電車を対象として、乗降容易性と車内での着席性・居住性を考慮した快適性を両立さ

せる評価手法を構築してきた。これは乗車時間に応じて快適性を評価しようという試みで、環境心理学におけるアフォーダンス理論を考慮した手法である。その結果、4人がけのボックスシートでは座席が有効に着席利用されないことが分かり、その改善のために座席を一人分追加した5人がけシートを提案してきた。

東急7000系にて実用化されたものは3人がけシートを両側に配置した方式で我が国唯一である。これは須田教授もゲストとして出席した東急モニター会議に

おける沿線利用者の意見も取り入れて採用されたものであり、千葉実験所における実物大評価実験の成果が社会に還元された一例といえる。快適性研究グループでは別掲のセミナーの開催やトヨタ自動車との共同研究も進めており、今後の活動を更に進めたいと考えている。

（機械・生体系部門 山口 大助）

（1）東急7000系



（2）7000系車内



（3）千葉実験所モックアップによる評価実験

研修受講者 間もなく100名！ —東京大学技術職員研修（試作工場実施）—

平成19年度東京大学技術職員研修「機械工作技術関係」ならびに「CAD／CAM技術関係」が、1月30日から2月1日の日程で開催されました。この研修で受講者数が延べ98名となりました。

そもそも技術職員の地位確立と待遇改善が叫ばれていた時代から開催し始めたこと記憶しており、過去には試作工場だけではなく映像技術室も開催してまいりました。

試作工場での技術職員研修は平成3年から実施し、すでに退職された諸先輩方の指導とリーダーシップにより今日の研修の基礎が築かれ、今回14回目を数えるまで発展することができました。

試作工場の駒場移転を機に機械設備が増強されたことで研修課程を増やすこともでき、現在では「機械工作技術」や「ガラス工作技術」のほか、「溶接技術」や「CAD／CAM技術」、「3次元測定技術」などの課程を実施しております（表1）。また研修実施にあたり講師となる試作工場職員が、事前に必要な資格を取得するなど積極的に研修に臨みました。

過去を思い起こすと、「木工工作技術」課程を実施し、また11月に実施した年には試作工場の年間行事の一つでもあり、鍛冶職人の安全を祈願する「鞆（ふいご）祭り」に参列して、同じ日に全国各地で催される神事を体験していただきました。

一方では悲しいこともあり、こうした研修の準備段階から私たち後輩を指導して下さった先輩職員の急逝という不幸な出来事もありました。

単なる反復ではなく、回を重ねるたびに内容を更新し続けてきた研修は今後も続き、そして受講者もまもなく100名を越えることでしょう。

この技術職員研修は、所内皆様のご理解ご協力が得られたからこそ継続することができました。

今後ともご支援、ご協力くださいますようお願いいたします。

（試作工場 谷田貝 悦男）

表1 年次別研修課程と受講者数一覧

回数	実施年度	研修課程	受講者数
第1回	平成3年度	機械工作技術関係	15
第2回	平成4年度	機械工作技術関係	13
第3回	平成7年度	機械工作技術関係	5
第4回	平成8年度	機械工作技術関係	6
第5回	平成9年度	木工工作技術関係 機械工作技術関係	2 5
第6回	平成10年度	ガラス工作技術関係 木工工作技術関係 機械工作技術関係	4 2 3
第7回	平成11年度	ガラス工作技術関係 木工工作技術関係 溶接技術関係 機械工作技術関係（旋盤中級）	2 2 3 2
第8回	平成12年度	ガラス工作技術関係 溶接技術関係 機械工作技術関係（旋盤中級）	2 3 0
第9回	平成13年度	ガラス工作技術関係 溶接技術関係 機械工作技術関係（旋盤中級）	3 3 2
第10回	平成14年度	溶接技術関係 機械工作技術関係（旋盤中級）	2 1
第11回	平成15年度	3次元測定技術関係 機械工作技術関係（ターニングセンタ初級） ガラス工作技術関係	1 1 3
第12回	平成17年度	機械工作技術関係（旋盤初級） 機械工作技術関係（旋盤中級）	2 0
第13回	平成18年度	ガラス工作技術関係 CAD／CAM技術関係 機械工作技術関係（旋盤初級） 機械工作技術関係（旋盤中級）	3 2 2 0
第14回	平成19年度	CAD／CAM技術関係 機械工作技術関係（旋盤中級） 機械工作技術関係（旋盤初級） 3次元測定技術関係	2 0 2 0
			98



機械工作技術（NC）研修風景（H8年度）



溶接技術研修風景（H11年度）



ガラス加工技術研修風景（H11年度）



木工技術研修風景（H11年度）



機械工作（鍛造）研修風景（H11年度）



平成11年度 東京大学技術職員研修

※写真は全て六本木時代

快適性の工学的応用に関する研究グループ 「快適性研究会シンポジウム」を愛媛大学にて開催



評価に関する研究」、上野佳奈子助教（元人間・社会系部門坂本研究室、現明治大学講師）の「快適空間設計のための音響心理学からのアプローチ」、須田研究室田淵義彦研究員の「Quality of lifeを目指した快適性の工学的取り扱い」と題した講演で本グループの日頃の研究成果を発表しました。また愛媛大学大学院理工学研究科の神野雅文准教授による「見かけの（等価）輝度を同じ

機械・生体系部門の須田義大教授を代表者とする「快適性の工学的応用に関する研究グループ」は3月7日、愛媛大学にて「快適性研究会シンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、須田

教授の「快適性の工学的研究の意義と重要性 ～鉄道車両の快適性を考慮した座席配置の実例をもとに～」、竹原昭一郎特任助教（元須田研究室、現首都大学東京助教）の「自動車車内の快適性

に保つ周期的矩形波のデューティ（点灯時間率）条件」と題した講演が行われ、快適性工学をはじめ関連分野について活発な議論が繰り広げられました。

（機械・生体系部門 山口 大助）

VISITS

生研訪問者

4月21日(月)

大韓民国 韓国機械研究院一行 Dr. Kyung-Hyun Whang 院長 他2名

外国人研究者講演会

主催：(財)生産技術研究奨励会

3月27日(木)

司会：教授 合原 一幸

Prof. Philip K. Maini
Centre for Mathematical Biology, Mathematical Institute,
University of Oxford, UK
MODELLING ASPECTS OF CANCER GROWTH

5月2日(金)

司会：教授 小長井 一男

Prof. David Muir Wood
Department of Civil Engineering, University of Bristol, UK
CRITICAL STATES AND SOIL MODELLING

4月21日(月)

司会：准教授 羽田野 直道

Dr. Ernest Estrada
Researcher, University of Santiago de Compostela, Spain
DETECTING COMMUNITIES IN COMPLEX NETWORKS

博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
NONTAGNE, Kevin Paul	フランス共和国	2008. 4.16～2009. 3.15	物質・環境系部門 酒井(康)研究室
BOTTIER, Celine	フランス共和国	2008. 4.22～2010. 4.21	マイクロメカトロニクス国際研究センター 藤田(博)研究室
BORDEL, Damien	フランス共和国	2008. 6. 1～2010. 5.31	ナノエレクトロニクス連携研究センター 荒川研究室



Berkeley 生活

マイクロメカトロニクス国際研究センター
竹内(昌)研究室 学術振興会P.D

尾上 弘晃

「面白い細胞の写真だ。テトリスみたいだね(笑)」

週に1回の研究会。僕の発表を聞いて、Richは笑いながらコメントした。僕は2007年の8月より、UC BerkeleyのProf. Richard Mathies(通称Rich)の研究室に、生研から長期出張で滞在している。Richの研究室には30人程度のメンバーがおり、研究会では毎回3-4人がそれぞれ30分ずつ発表する。開始が毎週金曜日の夕方16時からということもあり、研究会ではビールとスナックがふるまわれ、なごやかな雰囲気できっくばらんに議論する。

アメリカに出張するまでの3ヶ月間、マイクロメカトロニクス国際研究センターの竹内研究室でMEMSと細胞を絡めた研究に携わった。特に自分にとって生研で印象的だったのは、同じ建物の中に様々な分野の研究グループがあり、異分野交流のしやすい環境だと感じた。

Berkeleyでも共同研究が活発だ。大学院生や研究員たちもとてもフレンドリーで、どんどん話しかけてくる。しかも驚

くことに、皆日本のことにかなり興味深々である。「日本は世界一物価が高いんでしょ?」「成田空港にはロボットが出て出迎えるって本当?」「日本人はクリーンルームでお茶のむ?」…、人それぞれ色々な日本のイメージがあるようである。

「西海岸は気候のせいか、みんな人が明るくてフレンドリーだよ。」日本を発つ前に、よく耳にした言葉であるが、なるほど来て見てそうなのかも、と思う。天に抜けるような雲ひとつない青空、まぶしい太陽、でも風が涼しく気持ちよい。電車で20分いけば、世界有数の観光都市サンフランシスコ。車で1時間いけば、カリフォルニアワインの産地であるナパバレー。むりやり日本に例えるならば、「土地に余裕がある下北沢の街(パークレー)に生研(大学)があって、さらに銀座+横浜(サンフランシスコ)と、山じゃない軽井沢(ナパバレー)がすぐそばにある」と言えば、近い気がしないでもない、かもしれない。

さあ今日はこれから定例の研究会。ビールを片手にどんな研究発表が聞けるのか、楽しみである。



AWARDS

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
基礎系部門 機械・生体系部門	教授 吉川 暢宏 准教授 梅野 宜崇 助教 桑水流 理 准教授 白樫 了 技術職員 竹内 昌治 産学官連携研究員 大石 正道 福成 洋	感謝状 (社)日本機械学会バイオエンジニアリング部門	第3回アジア太平洋バイオメカニクス会議の運営と実施における貢献	2008. 1.25
物質・環境系部門	助教 野瀬 健二	学術奨励講演賞(第117回講演大会) 表面技術協会	ダイヤモンド核生成環境における照射イオンのエネルギー及びフラックスの定量化	2008. 3.13
戦略情報融合国際 研究センター	助教 岡部 孝弘	山下記念研究賞(社)情報処理学会	近接点光源は未校正照度差ステレオにおける形状復元の不定性を解決するか?	2008. 3.14
機械・生体系部門	教授 帯川 利之	精密工学会フェロー(社)精密工学会	精密工学分野における顕著な業績	2008. 3.18
物質・環境系部門 東京理科大学	准教授 小倉 賢 新部裕佳子 駒場 慎一	触媒学会第101回触媒討論会(創立50周年 記念大会)優秀ポスター発表賞 触媒学会	イソオクタン排出に対するHC reformer trap とPt触媒の複合効果	2008. 3.29
人間・社会系部門	教授 沖 大幹	文部科学大臣表彰(平成20年度科学技術分 野科学技術賞(研究部門)) 文部科学省	地球水循環 世界水資源統合モデルの構築 の研究	2008. 4.15
機械・生体系部門	准教授 竹内 昌治	文部科学大臣表彰(平成20年度科学技術分 野若手科学者賞) 文部科学省	バイオマイクロマシンの研究	2008. 4.15
機械・生体系部門	准教授 白樫 了	文部科学大臣表彰(平成20年度科学技術分 野若手科学者賞) 文部科学省	生体の長期高品位保存の研究	2008. 4.15

■学生部門

所属	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
情報・エレクトロ ニクス系部門 合原研究室	大学院学生 富岡 亮太	研究科長賞 東京大学大学院情報理工学系研究科	学位論文	2008. 3.24

PERSONNEL

人事異動

生産技術研究所 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3.31	吉田 敏	辞職	教授 公立大学法人首都大学東京産業技術大学院大学	准教授 人間・社会系部門
20. 3.31	荒木 武昭	辞職	准教授 京都大学大学院理学研究科	助教 基礎系部門
20. 3.31	呉 世訓	辞職	特任助教 大学院工学系研究科	助教 情報・エレクトロニクス系部門
20. 3.31	坂本 清志	辞職	助教 東北大学多元物質科学研究所	助教 物質・環境系部門
20. 3.31	吉中 進	辞職	特任講師 公立大学法人大阪市立大学	助教 人間・社会系部門
20. 3.31	上野佳奈子	辞職	講師 明治大学	助教 人間・社会系部門
20. 3.31	鍋島 憲司	辞職	—	助手 人間・社会系部門
20. 4. 1	割田 博	任命(免)	上級メンバー(正規職員) 首都高速道路株式会社	助教 人間・社会系部門

(学内異動(出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	堀 洋一	配置換	教授 大学院新領域創成科学研究科	教授 情報・エレクトロニクス系部門

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	佐藤 文俊	昇任	教授 附属革新的シミュレーション研究センター	准教授 情報基盤センター
20. 4. 1	須田 義大	配置換	教授 機械・生体系部門	教授 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	横井 秀俊	配置換	教授 機械・生体系部門	教授 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	櫻井 貴康	配置換	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	畑中 研一	配置換	教授 物質・環境系部門	教授 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	桑原 雅夫	配置換	教授 人間・社会系部門	教授 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	斎藤 敏夫	配置換	助教 情報・エレクトロニクス系部門	助教 国際・産学共同研究センター
20. 4. 1	影澤 政隆	配置換	助教 情報・エレクトロニクス系部門	助教 大学院情報学環

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	立間 徹	昇任	教授 物質・環境系部門	准教授 物質・環境系部門
20. 4. 1	村松 伸	昇任	教授 人間・社会系部門	准教授 人間・社会系部門
20. 4. 1	大原 美保	昇任	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター	助教 人間・社会系部門
20. 4. 1	火原 彰秀	配置換	准教授 附属計測技術開発センター	准教授 物質・環境系部門
20. 4. 1	大岡 龍三	配置換	准教授 人間・社会系部門	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター
20. 4. 1	腰原 幹雄	配置換	准教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター	准教授 人間・社会系部門

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	沢田 治雄	採用	教授 附属都市基盤安全工学国際研究センター都市基盤情報ダイナミクス分野	—
20. 4. 1	岩船由美子	採用	講師 附属エネルギー工学連携研究センター	—
20. 4. 1	崔 琥	採用	助教 基礎系部門	—
20. 4. 1	古川 亮	採用	助教 基礎系部門	—
20. 4. 1	巻 俊宏	採用	助教 附属海中工学研究センター	—
20. 4. 1	荻 芳郎	採用	助教 人間・社会系部門	—
20. 4. 1	洪 性俊	採用	助教 人間・社会系部門	—
20. 4. 1	横山 栄	採用	助教 人間・社会系部門	—

(任期付教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	小長井和男	配置換	教授 基礎系部門マテリアルダイナミクス分野	—
20. 4. 1	藤田 博之	配置換	教授 附属マイクロメカトロニクス国際研究センターマイクロ・ナノメカトロニクス分野	—
20. 4. 1	前田 正史	配置換	教授 附属サステイナブル材料国際研究センター物質循環工学分野	—

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	加藤 信介	配置換	教授 附属計測技術開発センター物理計測分野	—
20. 4. 1	岡野 達雄	任期更新	教授 基礎系部門真空物理学分野	—
20. 4. 1	黒田 和男	任期更新	教授 基礎系部門量子光学デバイス分野	—
20. 4. 1	渡邊 正	任期更新	教授 附属サステイナブル材料国際研究センター持続性材料化学分野	—

(所長・附属研究施設長)

発令年月日	氏名	異動内容	新兼務職名・兼務職名	旧兼務職名
20. 4. 1	野城 智也	兼務	副所長	—
20. 4. 1	加藤 千幸	兼務	副所長	—
20. 4. 1	前田 正史	兼務	附属サステイナブル材料国際研究センター長	—
20. 4. 1	加藤 信介	兼務	附属計測技術開発センター長	—
20. 4. 1	藤田 博之	兼務	附属マイクロメカトロニクス国際研究センター長	—

(兼任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
20. 4. 1	坂内 正夫	兼任	教授 附属戦略情報融合国際研究センター	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 理事 国立情報学研究所長

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
20. 4. 1	西尾 茂文	兼務	教授 機械・生体系部門	理事・副学長
20. 4. 1	大島 まり	兼務	教授 機械・生体系部門	教授 大学院情報学環
20. 4. 1	鈴木 高宏	兼務	准教授 機械・生体系部門	准教授 大学院情報学環
20. 4. 1	荒川 泰彦	兼務	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 先端科学技術研究センター
20. 4. 1	池内 克史	兼務	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 大学院情報学環
20. 4. 1	堀 洋一	兼務	教授 情報・エレクトロニクス系部門	教授 大学院新領域創成科学研究科
20. 4. 1	瀬崎 薫	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 空間情報科学研究センター
20. 4. 1	高宮 真	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 大規模集積システム設計教育研究センター
20. 4. 1	佐藤 洋一	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 大学院情報学環
20. 4. 1	岩本 敏	兼務	准教授 情報・エレクトロニクス系部門	准教授 先端科学技術研究センター
20. 4. 1	尾張 真則	兼務	教授 物質・環境系部門	教授 環境安全研究センター
20. 4. 1	酒井 康行	兼務	准教授 物質・環境系部門	准教授 大学院医学系研究科
20. 4. 1	安達 毅	兼務	准教授 物質・環境系部門	准教授 環境安全研究センター
20. 4. 1	柴崎 亮介	兼務	教授 人間・社会系部門	教授 空間情報科学研究センター
20. 4. 1	山地 憲治	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	佐藤 光三	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	堂免 一成	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	田中 知	兼務	教授 附属エネルギー工学連携研究センター	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	鹿園 直毅	兼務	准教授 附属エネルギー工学連携研究センター	准教授 大学院工学系研究科

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	旧職名・旧所属
20. 4. 1	許 正憲	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属海中工学研究センター	—
20. 4. 1	高川 真一	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属海中工学研究センター	—
20. 4. 1	小高 俊彦	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属戦略情報融合国際研究センター	—
20. 4. 1	澤田 賢治	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属サステイナブル材料国際研究センター	—
20. 4. 1	富山 哲男	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 人間・社会系部門	—
20. 4. 1	横田 弘	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属都市基盤安全工学国際研究センター	—

PERSONNEL

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	旧職名・旧所属
20. 4. 1	CHUNG, Edward	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 先進モビリティ(ITS) 連携研究センター	—
20. 4. 1	田中 敏久	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 先進モビリティ(ITS) 連携研究センター	—
20. 4. 1	宮崎 早苗	委嘱 称号付与	講師(客員教授) 附属都市基盤安全工学 国際研究センター	—
20. 4. 1	塚本 修	委嘱	教授	(本務:経済産業省大臣 官房技術総括審議官)
20. 4. 1	藤田 明博	委嘱	教授	(本務:文部科学省研究 開発局長)

(寄付研究部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
20. 4. 1	志村 努	兼務	特任教授 カラー・サイ エンス寄付研究部門	教授 基礎系部門
20. 4. 1	黒田 和男	兼務	特任教授 ニコン光工 学寄付研究部門	教授 基礎系部門

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3. 31	高松 淳	辞職	准教授 奈良先端科学 技術大学院大学	産学官連携研究員・ 特任講師
20. 3. 31	大塚 真吾	辞職	専門研究職 独立行政法 人物質・材料研究機構	産学官連携研究員・ 特任助教
20. 3. 31	前田 文孝	辞職	—	科学技術振興特任教員・ 特任助手
20. 4. 1	村岡 未帆	任命	特任研究員	産学官連携研究員・ 特任助手(CCR)
20. 4. 1	石田 義洋	採用	特任教授(短時間)	—
20. 4. 1	畑田 敏夫	採用	特任教授	—
20. 4. 1	池田 雅弘	採用	特任助教	—
20. 4. 1	山邊 茂之	採用	特任助教(短時間)	—
20. 4. 1	平田 祥人	採用	特任助教	—
20. 4. 1	梅野 顕憲	採用	特任助教	—
20. 4. 1	川上 玲	採用	特任助教	—
20. 4. 1	宮崎 大輔	採用	特任助教	—
20. 4. 1	井原 章之	採用	特任助教(短時間)	—
20. 4. 1	永井 崇	採用	特任助教(短時間)	—
20. 4. 1	松原 一喜	採用	特任助教	—
20. 4. 1	井上 茂	採用	特任助教(短時間)	—
20. 4. 1	KELLY KEVIN LANCE	採用	特任助教(短時間)	産学官連携研究員・ 特任助教
20. 4. 1	安 台浩	採用	特任助教(短時間)	—

生産技術研究所 技術系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3. 31	山内 成人	辞職	—	技術職員 基礎系部門
20. 3. 31	鶴 達郎	定年退職	—	技術専門員 物質・環 境系部門
20. 3. 31	藤野千和子	定年退職	—	技術専門員 人間・社 会系部門
20. 3. 31	小西 義幸	定年退職	—	技術専門員 試作工場
20. 3. 31	松崎 幹康	定年退職	—	技術専門員 試作工場

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	稲垣 賢一	昇任	技術専門職員 情報・エ レクトロニクス系部門	技術職員 国際・産学 共同研究センター

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	板倉 博	昇任	技術専門員 機械・生 体系部門	技術専門職員 機械・ 生体系部門
20. 4. 1	小野寺 章	昇任	技術専門員 試作工場	技術専門職員 試作工場
20. 4. 1	鈴木 常夫	昇任	技術専門員 機械・生 体系部門	技術専門職員 機械・ 生体系部門
20. 4. 1	瀬川 茂樹	昇任	技術専門員 機械・生 体系部門	技術専門職員 機械・ 生体系部門
20. 4. 1	高橋 岳生	昇任	技術専門員 計測技術 開発センター	技術専門職員 計測技 術開発センター
20. 4. 1	高間 信行	昇任	技術専門員 機械・生 体系部門	技術専門職員 機械・ 生体系部門
20. 4. 1	平原 清光	昇任	技術専門員 電子計算 機室	技術専門職員 電子計 算機室
20. 4. 1	福尾 哲二	昇任	技術専門員 試作工場	技術専門職員 試作工場
20. 4. 1	小山 省司	昇任	技術専門職員 基礎系 部門	技術職員 基礎系部門

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	藤居 文行	昇任	技術専門職員 情報・エ レクトロニクス系部門	技術職員 情報・エ レクトロニクス系部門
20. 4. 1	吉田 善吾	昇任	技術専門職員 機械・ 生体系部門	技術職員 機械・生 体系部門

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	鶴 達郎	再雇用	再雇用教職員 物質・ 環境系部門	—
20. 4. 1	小西 義幸	再雇用	再雇用教職員 試作工場	—
20. 4. 1	松崎 幹康	再雇用	再雇用教職員 試作工場	—
20. 4. 1	岡田 和三	任期更新	再雇用教職員 機械・ 生体系部門	—
20. 4. 1	鳥光 道枝	任期更新	再雇用教職員 人間・ 社会系部門	—
20. 4. 1	中村 英俊	任期更新	再雇用教職員 映像技 術室	—
20. 4. 1	石川 利明	任期更新	再雇用教職員 附属千 葉実験所	—

生産技術研究所 事務系

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3. 31	高橋 忠	定年退職	—	総務課主査(国際産学 チーム)
20. 3. 31	薩日内いさを	定年退職	—	総務課主任(研究総務 チーム)

(学内異動(出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	小林 和幸	昇任	大学院経済学研究科・ 経済学部 事務長	経理課長
20. 4. 1	渡邊 重夫	配置換	施設・資産系施設企画 グループ施設総務チ ーム係長	経理課係長(財務・監 査チーム)

(出向)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	高田 雅美	在籍出向 (昇任)	京都大学大学院工学研 究科学術協力課主任 (研究協力掛)	経理課一般職員(連携 研究支援室企画チーム)
20. 4. 1	熊谷果奈子	在籍出向	人事・労務系人事企画 グループ付文部科学省 研修生	総務課一般職員(人事 ・厚生チーム)

(学内異動(入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	山守 康貴	配置換	総務課一般職員(人事 ・厚生チーム)	人事・労務系人材育成 グループ能力開発チ ーム一般職員

(採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	稲垣 博明	採用	経理課長	東京学芸大学総務部企 画課長
20. 4. 1	松本 武彦	採用	経理課係長(財務・監 査チーム) 財務・監 査チームリーダー	独立行政法人国立美術 館国立新美術館運営管 理部係長(会計担当)
20. 4. 1	渡辺 恵理	採用	総務課一般職員(国際 交流チーム)	総括プロジェクト機構 JR東日本安全安心工学 総括寄附講座 事務補 佐員(短時間)

(所長・附属研究施設長)

発令年月日	氏名	異動内容	新兼務職名・兼務職名	旧兼務職名
20. 4. 1	依田 晴樹	兼務	副所長	—

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	中村 正樹	昇任	経理課係長(施設管理 チーム)	経理課主任(施設管理 チーム)
20. 4. 1	伊熊 正則	昇任	総務課主任(総務・広 報チーム)	総務課一般職員(総務 ・広報チーム)
20. 4. 1	関 豊	命	国際産学チームリーダー	総務課係長(国際産学 チーム)

(再雇用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	高橋 忠	再雇用	再雇用教職員 総務課 国際産学チーム	—
20. 4. 1	二宮 一郎	任期更新	再雇用教職員 総務課 図書チーム	—
20. 4. 1	小出 幸夫	任期更新	再雇用教職員 千葉実 験所事務室	—
20. 4. 1	野口 宏	任期更新	再雇用教職員 千葉実 験所事務室	—

PERSONNEL

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3.14	佐藤 綾子	休職更新	総務課一般職員(人事・厚生チーム)	—

国際・産学共同研究センター 教員等

(退職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 3.31	久保山哲二	辞職	—	助教

(学内異動(出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	渡部 俊也	配置換	教授 先端科学技術研究センター	教授
20. 4. 1	香川 豊	配置換	教授 先端科学技術研究センター	教授
20. 4. 1	森川 博之	配置換	教授 先端科学技術研究センター	教授
20. 4. 1	吉田 直哉	配置換	助教 先端科学技術研究センター	助教

(センター長)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	渡部 俊也	兼務(免)	—	国際・産学共同研究センター長

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	今泉 英明	任命	特任講師 先端科学技術研究センター	産学官連携研究員・特任助教

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(兼務教員)

発令年月日	氏名	異動内容	兼務職名・所属	本務職名・所属
20. 4. 1	荒川 泰彦	兼務	教授	教授 先端科学技術研究センター
20. 4. 1	今井 浩	兼務	教授	教授 大学院情報理工学研究所
20. 4. 1	大津 元一	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	勝本 信吾	兼務	教授	教授 物性研究所
20. 4. 1	菊池 和朗	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	五神 真	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	田中 雅明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	樽茶 清悟	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	平川 一彦	兼務	教授	教授 生産技術研究所
20. 4. 1	平本 俊郎	兼務	教授	教授 生産技術研究所
20. 4. 1	古澤 明	兼務	教授	教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	山内 薫	兼務	教授	教授 大学院理学系研究科
20. 4. 1	染谷 隆夫	兼務	准教授	准教授 大学院工学系研究科
20. 4. 1	高橋 琢二	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
20. 4. 1	町田 友樹	兼務	准教授	准教授 生産技術研究所
20. 4. 1	村尾 美緒	兼務	准教授	准教授 大学院理学系研究科
20. 4. 1	岩本 敏	兼務	准教授	准教授 先端科学技術研究センター
20. 4. 1	中岡 俊裕	兼務	特任准教授	特任准教授 生産技術研究所

(客員部門)

発令年月日	氏名	異動内容	職名・所属	本務職名・所属
20. 4. 1	石田 寛人	委嘱称号付与	講師(客員教授)	—
20. 4. 1	長我部信行	委嘱称号付与	講師(客員教授)	—
20. 4. 1	曾根 純一	委嘱称号付与	講師(客員教授)	—
20. 4. 1	高橋 明	委嘱称号付与	講師(客員教授)	—
20. 4. 1	横山 直樹	委嘱称号付与	講師(客員教授)	—
20. 4. 1	野田 進	委嘱	教授	教授 京都大学工学研究科
20. 4. 1	山本 喜久	委嘱	教授	教授 情報・システム研究機構国立情報学研究所
20. 4. 1	竹内 繁樹	委嘱	教授	教授 北海道大学電子科学研究所

地球観測データ統合連携研究機構 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	安川 雅紀	採用	特任助教	—
20. 4. 1	角谷 拓	採用	特任助教	—
20. 4. 1	筒井 浩行	採用	特任助教	—
20. 4. 1	李 亮源	採用	特任助教	—
20. 4. 1	絹谷 弘子	採用	特任助教(短時間)	—

総括プロジェクト機構寄付研究部門「水の知」(サントリー)

総括寄付講座 教員等

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
20. 4. 1	横尾 善之	採用	特任准教授	—
20. 4. 1	村上 道夫	採用	特任助教	—

昇任のご挨拶

附属革新的シミュレーション研究センター
教授

佐藤 文俊



客員助教授として生研に着任してから早いもので5年半経ちました。以来、様々な勤務に携わる機会に恵まれましたが、これらの経験は生研の素晴らしさを再認識させるものでした。このたび幸いにも教授陣の末席に加えていただくことになりました。専門である計算生体分子科学がいよいよ佳境に入り、生研ならではの実用的で革新的なシミュレーション研究に貢献していきたいと思っております。新しい時代を切り開くべく、さらに努力を続ける所存です。

物質・環境系部門 教授

立間 徹



4月1日付で教授に昇任させていただきました。専門は電気化学で、応用化学専攻に属しております。最近では、プラズモン共鳴を利用した光電気化学を中心に研究しています。金属ナノ粒子と酸化半導体の界面で光誘起電荷分離が起こることを見出し、これを光電変換、光触媒、多色フォトクロミズム、光アクチュエータなどに応用しています。学生の頃からお世話になっている生研が、研究・教育に最適な場であり続けるために、一層努力してゆきたいと思っております。

PERSONNEL

人間・社会系部門 教授

村松 伸



建築史や都市史は、工学の中でも異質で、異なる時間と空間をまたにかけ、そこから、洞察・省察・規範・教訓・継承という学問行為を行う。直接、ものを作りだすわけでも、建設に関与するわけではないが、都市や建築にとっての「豊長性」を担保する。哲学者の山内志朗さんの言う、リダンダンシーの訳である「豊長性」は、誤謬の自己検証機能を有し、生物でいえば、多様性が持つ機能でもある。まだ、しばらく生研にいられるので、ぞうちょうせずに、じょうちょう学問のじょうちょう教授になりたいものだ。

機械・生体系部門 教授

塚本 修



この度、東京大学生産技術研究所の教授（非常勤）を拝命することになりました経済産業省大臣官房審議官の塚本です。平成18年10月から、この3月まで、東京大学国際産学官共同センター教授（非常勤）を拝命しておりました。イノベーションを先導する産学連携政策等経済産業省の取り組みをベースに、種々の情報発信、議論を展開して参りたいと思っております。よろしくお願い致します。

附属都市基盤安全工学国際研究センター
准教授

大原 美保



2008年4月1日付けで附属都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS）の准教授に着任致しました大原美保です。今年度から、東京大学情報学環・地震研究所・生産技術研究所の3部局の連携により、「情報」を核とした文理融合型拠点として「総合防災情報研究センター（CIDIR）」が設立されました。今後は、CIDIRと生研をつなぐ橋渡し役をつとめながら、大学の災害対応モデルの開発や防災情報の効果的な活用法の提案を目指します。今後ともよろしくお願い申し上げます。

教授

藤田 明博



本年4月1日付けにて非常勤の教授として着任いたしました。3月末までの2年間、国際・産学共同研究センターの非常勤教授を務めさせていただき、文部科学省の産学連携政策や国家基幹技術等科学技術政策全般とセンター事業との関わりに関して不十分ながら助言等をさせていただきました。そのご縁もあって、今回本研究所にてお世話になることとなったものと理解しています。センター在任当時と同様、役所と生産研との間の連絡調整や科学技術に関する助言等をさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

■着任のご挨拶

附属都市基盤安全工学国際研究センター
教授

沢田 治雄



4月1日付けで附属都市基盤安全工学国際研究センター（ICUS）の教授に着任いたしました。専門分野は、リモートセンシングを主とする地球観測情報の実利用法開発です。これまでは独立行政法人森林総合研究所で、国内外における森林情報の把握・利用法開発研究や、地球規模の環境問題における森林生態系の役割に関する研究を行ってきました。今後も（ICUS）を通して活動を広げて参りたいと考えています。よろしくお願い致します。

附属サステイナブル材料国際研究センター
客員教授

澤田 賢治



4月1日付けでサステイナブル材料国際研究センターに客員教授として着任致しました。長年、政府機関や国際機関で鉱物資源探鉱事業の推進や資源経済学の観点から調査研究（鉱業のコスト分析、メジャーの資源戦略、世界や中国等の資源需給動向）を行っています。生産技術研究所は週1日（水or木）の勤務ですが、資源問題に関する情報提供を通じて貢献したいと思います。気軽にお声をかけてください。どうぞ、よろしくお願い致します（連絡先：kenji@iis.u-tokyo.ac.jp）。

PERSONNEL

先進モビリティ（ITS）連携研究センター
客員教授

田中 敏久



このたび、国際・産学共同研究センター（CCR）の改編に伴い、生産技術研究所の客員教授に着任した田中です。2003年度にCCR客員教授に就任し、ITSの実用化・事業化、地域ITSの普及・展開、ITS分野の人材育成、ITSの産学連携の仕組み作り等ITSの普及、事業化を民間企業の立場から指導してきております。ITSは総合融合工学といわれ、多分野の企業、研究室の横断的連携が必要で、CCRでは産官学の新しい連携による「サステイナブルITSの展開研究」を行いました。現在、生産技術研究所ITSセンターで、セカンドステージの研究開発を行っています。

ITSは多分野にわたる要素技術の融合が必要となります。これからはテーマによっては多くの先生方との共同研究が必要となるケースが多々あるかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

附属エネルギー工学連携研究センター
講師

岩船由美子



4月1日付で附属エネルギー工学連携研究センターに着任しました。これまでは（株）住環境計画研究所というシンクタンクで主として民生部門のエネルギーに関する調査を行ってきました。エネルギー工学連携研究センターに所属し、持続可能なエネルギーシステムについて需給両面から研究を行いたいと思っております。生研は木々がきれいで通勤も楽しいです。どうぞよろしくお願いいたします。

附属計測技術開発センター 特任教授

石田 義洋



4月1日付で「都市の安全・環境シミュレーションシステムの研究開発」担当の特任教授に着任しました。元職の鹿島建設では環境関連、特に建物内外の気流解析法の研究開発に携わり、この4年間は人間・社会系部門加藤・大岡研究室で市街地の風環境の評価手法、環境影響物質の気中拡散発生時の物質濃度の非常常解析法を研究してきました。引き続き発生位置の特定方法等の研究を進めます。ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

附属革新的シミュレーション研究センター
特任教授

畑田 敏夫



4月1日付けで着任しました。日立製作所機械研究所の出身で、ここ10年位は開発・設計の効率向上のためのデジタルエンジニアリングに関する研究開発に従事しています。平成14年度からは生研に常駐して、文科省の戦略・革新プロジェクトに参加してきました。この4月からは、革新的シミュレーション研究センターの一員に加えていただきましたので、気分も一新して、イノベーション創出を牽引できる、シミュレーション技術を核とした次世代型デジタルエンジニアリングシステムの実現をめざして努力したいと考えています。よろしくお願いいたします。

経理課長

稲垣 博明



4月1日付けで東京学芸大学企画課から着任しました。東京大学は5年振りの勤務で、この間の変わりようは目を見張るものがあります。とは言え、この駒場リサーチキャンパスは、変わりなく緑に包まれた自然豊かな環境で、私にとっては懐かしさを感じさせてくれます。このたび担当させていただく経理業務は、広く、教育・研究を円滑に実施する上で重要であるだけでなく、経営の観点も求められていると考えます。奇をてらうことなく、安定感ある業務運営を心がけたいと思っておりますので、皆様よろしくお願いいたします。

定年退職



●物質・環境系部門
酒井(康)研究室 技術専門員
鶴 達郎



●人間・社会系部門
安岡研究室 技術専門員
藤野千和子



●試作工場
技術専門員
小西 義幸



●試作工場
技術専門員
松崎 幹康



●総務課
国際産学チーム 主査
高橋 忠



●総務課
研究総務チーム 主任
薩日内いさを

PERSONNEL

採用



●基礎系部門
中塾研究室 助教
崔 琥



●基礎系部門
田中研究室 助教
古川 亮



●附属海工工学研究センター
浦研究室 助教
卷 俊宏



●人間・社会系部門
川口研究室 助教
萩 芳郎



●人間・社会系部門
桑原研究室 助教
洪 性俊



●人間・社会系部門
坂本研究室 助教
横山 栄



●経理課 係長
財務・監査チームリーダー
松本 武彦



●総務課 一般職員
国際交流チーム
渡辺 恵理

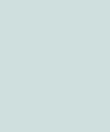
配置換



●情報・エレクトロニクス系部門
池内研究室 助教
影澤 政隆



●総務課 一般職員
人事・厚生チーム
山守 康貴



●情報・エレクトロニクス系部門
荒川研究室 助教
齋藤 敏夫

CAMPUS TOUR

生研の「煙」事情

近年、路上喫煙禁止条例など、禁煙を促進する動きが強まっていますが、生研においても喫煙対策は盛んに行われています。そこで今回は、駒場Ⅱリサーチキャンパスにおける「煙」事情について喫煙者の立場からレポートしてみたいと思います。

東京大学では、平成20年4月1日から東京大学喫煙対策宣言を公表し、下記のような措置が取られました。

1. キャンパス内原則禁煙（指定喫煙場所を除く）
2. 喫煙場所の整備と管理による十分な受動喫煙防止と防火措置
3. 大学敷地内でのタバコの販売の禁止
4. 禁煙指導などの支援
5. 3年以内の喫煙対策基本方針の見直し

これを受けて、生研所内で具体的に取られた対策は以下のようになります。

1. 生研の建物内に現存する喫煙室については維持し、予算の措置がなされた箇所から順次、規定の換気量を確保するための整備を行う。
2. 屋上に設置されている灰皿については撤去し全面禁煙とする。
3. 屋外に三箇所、15号館東側、As棟西側および13号館と14号館間の中庭（図参照）、喫煙所を設置する。
4. 上記で設置した喫煙室、喫煙所以外での喫煙は禁止し、「歩行禁煙」等の掲示により啓発に努める。

本郷キャンパスが基本的に全館禁煙となり、わずかな喫煙所を設置するののみとなってしまったのに対し、生研では屋内の喫煙所は残す方針になったのは、喫煙

者にとって朗報です。キャンパス内でのタバコの販売が中止されたため、多少の手間がかかるようにはなりましたが、全体的に見て喫煙者を圧迫することなく分煙をきちんと実施している良いキャンパスではないかと思います。

喫煙者にとって喫煙所とは、時には研究について熱心に話し合い、時にはくだらない話もし、見ず知らずの他の研究室の人々とも肩の力を抜いて仲良く語り合える場所です。しかし、非喫煙者にとっての喫煙所は、人体に有害で「無駄な」場所です。非喫煙者にとっても喫煙者にとっても住み心地の良いキャンパスの維持のためにも、喫煙者の皆さん、煙を外に出さない、吸った後は口臭に注意する、サボっていると思われるほど長く喫煙しないなど、マナーの良い喫煙を心がけましょう。

(マイクロメカトロニクス国際研究センター
竹内(昌)研究室 修士1年 岩井 孝介)

喫煙所にて論文片手に
囲らんする様子



屋外喫煙所および喫煙所のサイン



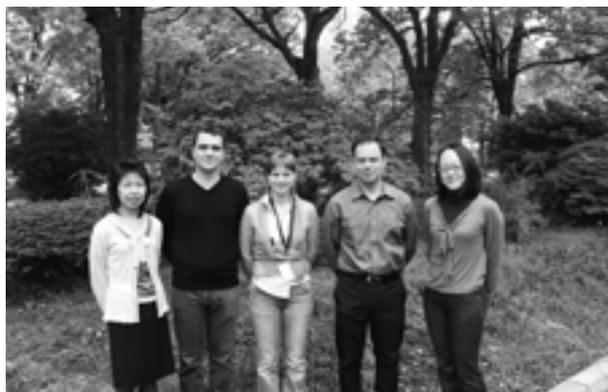
屋外喫煙所の例（13号館14号館間中庭）

・ PROMENADE ・

日本に暮らして思うこと

昨年10月からLIMMS（集積化マイクロメカトロニックシステム日仏共同研究室）のメンバーとして生研でお世話になっています。生研での肩書きは外国人客員研究員。顔と名前からご察いただけるように、正真正銘、日本人なのですが、フランス国立科学研究センターの常勤研究員なので、このような肩書きを頂戴しています。この外国人という肩書きのお陰で、ユニークな経験をしています。なんと言っても自己紹介。初対面の方なら、「あっ、外国の方なんですか。」と訊ねられ、旧知のひとは、「遂にフランス人になっちゃったのか。」と言われます。経緯を説明した後は、たいていフランスのことを聞かれます。時事問題や、風土、文化の違いなど内容はひとそれぞれ。10年近く住んでいたというところ、当人はまだまだ、フランス生活の素人で文化の違いに驚くばかりなのです。だから、少しフランスに出かけてきた人にも教わることが沢山あります。ここで面白いのは、日本人の視点、もしくはその人個人の独特の視点からフランスを観ることができることです。フランス人が仕事帰りに毎日フランスパンを買うためにパン屋さんに行列し、小脇に抱えて闊歩する様子は日本人には余りにも絵に描かれたようなイメージと合致しすぎていて愉快です。彼らにはごく普通の日常の光景にすぎないのだろうけれど。パターン認識の専門家にはバリの歩行者信号には2つの図柄が有るんだと、と教えてもらいました。

逆に、生研では周りの“本物の外国人”（主にフランス人）からは、当然ながら、日本のことを質問されます。「油揚げ



LIMMSのメンバー達と。右端が著者。

は何からどうやって作るの。」やら「こどもの日に揚げる鯉のぼりは何で鯉なの」など、普通の日本人には当たり前になってしまうことを聞かれ、「豆腐を揚げると厚揚げになっちゃうし…」、「中国のどんな故事だったっけ？」と浅学の私には返答に困ることがしばしばあります。

こうして、私は両文化への理解を深めている(?)のですが、これも、小さな国際交流と楽しんでいます。

そういえば、今年は日仏の国際交流が開始してから150周年で、巷でも、これに因んだ様々な催し物が行われています。この機会に、生研内の、身近なフランスに触れられてみるのは如何でしょうか。

(マイクロメカトロニクス国際研究センター 竹内(昌)研究室
外国人客員研究員 吉澤 聡子)

INFORMATION

第4回東京大学駒場キャンパス 技術発表会発表者募集について

第4回駒場キャンパス技術発表会実行委員会

第4回東京大学駒場キャンパス技術発表会の発表者を募集いたします。

技術職員が日常業務で携わっている実験装置の開発、維持管理から改善、改良の話題に及ぶ広範囲な技術的研究支援活動から得られた成果のみならず、研究・開発しようと思った動機や研究・開発途中におけるつまずき等をどのように乗り越えてきたか、あるいは失敗についても参加者全員で討論できるような技術にかかわる内容などを募集いたします。

また個別研修や全学研修の報告、定年を迎える方が技術職員に伝えたいことや技術職員としての集大成、また若手技術職員の5年毎の仕事内容の見直し報告、あるいは再雇用熟練技術職員が今まで身につけた技術の公開等、職務上の技術問題に限定せず、技術職員等の能力向上に役立つものであれば、どのような分野でも歓迎いたします。

みなさまの積極的な応募をお待ちしております。ご応募は右記実行委員へお願いいたします。

募集要項

開催日：2008年10月17日(金)

場所：駒場リサーチキャンパス（大会議室 An301、302）

応募資格：技術職員、教務系技術職員、助手、助教、事務職員
発表形式：口頭発表（20～30分）、誌上发表

応募〆切：2008年7月18日(金)

応募先：（第1部）片倉 智：内線56111
（第2部）島崎 守：内線57332
（第3部）稲垣 賢一：内線56253
（第4部）黒岩 善徳：内線56332
（第5部）小駒 幸江：内線56374
（試作工場）谷田貝悦男：内線58710
（計算機室）鈴木 常夫：内線58286
（教養学部）菅沼 諭：内線46128
（教養学部）椎木 紀子：内線46126

Webの大規模時系列データから 話題の変遷を探る

戦略情報融合国際研究センター 准教授 豊田 正史

Web上には、ニュース、動画、音楽、広告、商品販売、企業情報、個人ホームページ、ブログ、掲示板、論文など、多様な情報が膨大に存在し、それらがハイパーリンクという仕組みで結合された複雑なネットワーク構造を持っている。しかも、その構造は現実世界とサイバー世界との間の相互作用により日々変化し続けている。この相互作用は幅広くかつ密になる傾向を強めており、最近では、Web上で商品や映画が話題となり、それが既存のマスメディアで取り上げられることによりさらに人気が出るといった現象は珍しいものではなくなってきた。

こうした時系列的なWebの発展過程から話題の発生および変遷を観測・解析するため、我々は1999年から日本語Webページの継続的な大規模収集を開始し、現在数十テラバイト規模のWebアーカイブの構築を行ってきた。収集した膨大なWeb情報を解析することで、文書の内容、リンク構造、それらの動的な変化から有用な情報を抽出し、可視化技術等を駆使することで、Web上の話題の変遷を明らかにすることができる。

例として、特定の事業に関する企業間のパワーバランスの変化を黎明期から観測した結果を図1に示す。これは携帯電話用Web検索エンジンの変遷を示している。互いに関連する検索サイトが線で結ばれたネットワーク図を時間ごとに並べて可視化し、時系列変化を図示している。黎明期にはベンチャー企業や個人サイトを中心に検索サービスが展開していたが、大手検索サイトの参入をきっかけに大手中心の構造に移行していく様子が確認できる。本技術では、話題の黎明期からの変化を調べ、成長期、成熟期、衰退期などの成長ステージを把握することが可能である。

また、Web上の情報伝播には、インフルエンサーと呼ばれる影響力の強い人物の果たす役割が大きいと考えられており、これを把握することが重要な意味を持つ。そこでリンク構造の時系列的な変化を可視化し追跡することによりインフルエンサーの移り変わりを把握可能とする解析・可視化手法を開発した。図2には、「生協の白石さん」という書籍の元となったブログ上での大きな話題発展の様子を示す。この図では、テキスト情報から特定の話題に関するブログを抽出し、ブログ間のリンク構造の時系列変化を可視化している。初期には右下のブログが話題の中心となっていたが、成長期に左下に現れたブログがインフルエンサーとなって爆発的に話題が成長していった様子が見て取れる。

本研究については、現在、社会学者、言語学者、経済学者、マーケティング関連企業などと共同研究を行い、様々な事例において有用性を確認している。新たな要請も寄せられており、今後も様々な発展が期待できる。

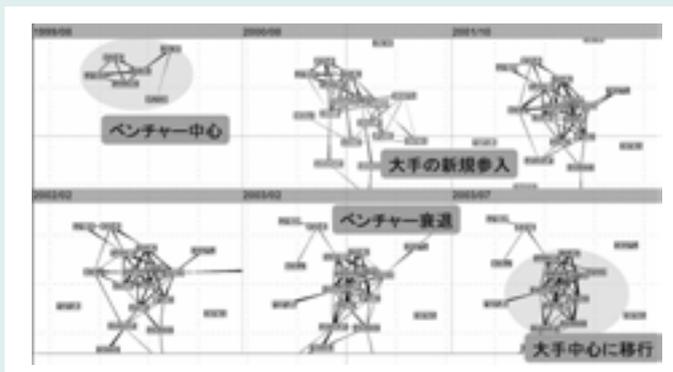


図1 携帯電話用Web検索エンジンの変遷



図2 ブログ空間上での話題の伝播過程

■編集後記■

正門近くに2畳ほどの小さな池がある。「知のブロムナード」計画の一環で、最近整備された「空への道」の一部として完成したものだ。先日、そこを通りかかると、なんと池が真っ黒になっている。何事かと近づいて見ると、小さな点がウヨウヨ。オタマジャクシだ。小学校以来のご無沙汰で、久しぶりの再会にしばし仕事

を忘れて少年気分を満喫した。本号が発刊されるのは、キャンパス公開にあわせた5月末。その頃には、ケロケロとにぎやかになっているかもしれない。公開へお越しの際は、池を覗いて若ガエルのはいかが？

(竹内 昌治)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所

☎(03)5452-6017内線56017、56018

■編集スタッフ

竹内 昌治・桑水流 理・高宮 真

小倉 賢・竹内 渉・三井 伸子

E-mail: iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp

生研ホームページ

http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/